

梶山女学園大学

# 情緒的日本文化の映像表現に関する基礎的研究 : 1964年東京オリンピックがもたらす日本らしさ・東京らしさを映し出すテレビの進歩

著者	飯塚 恵理人, 脇田 泰子
雑誌名	梶山女学園大学文化情報学部紀要 = Journal of the Faculty of Culture-Information
巻	19
ページ	1-13
発行年	2019
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00002809/">http://id.nii.ac.jp/1454/00002809/</a>

---

# 情緒的日本文化の映像表現に関する基礎的研究

～1964年東京オリンピックがもたらす日本らしさ・東京らしさを映し出すテレビの進歩～

## Preliminary Research into the Expression of Emotionally-Evocative “Deep” Japanese Culture on Film

—Advances in Television Enabling it to Convey The “Essence” of Japan and Tokyo Brought Out during the Lead-up to the 1964 Tokyo Olympics—

飯塚恵理人      脇田泰子

---

### 1. はじめに

---

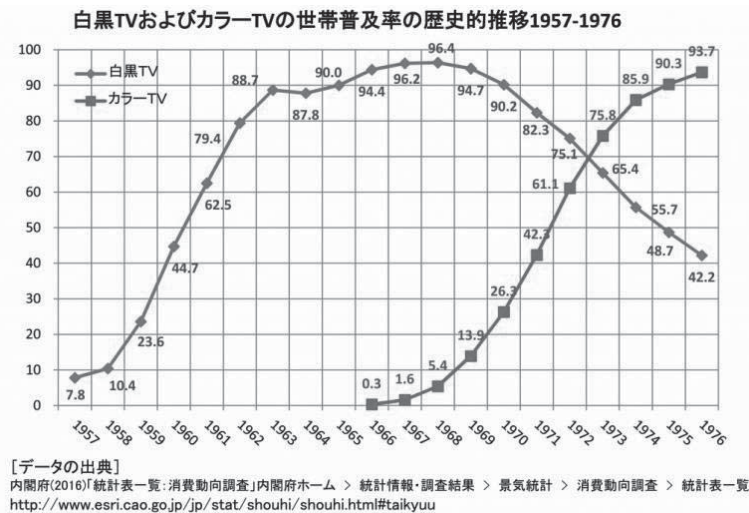
日本の美・日本情趣の表現については、古く万葉集・古今集の時代から和歌的な世界が確立され、風景についても歌枕・名所への関心を持つ層が主に貴族や武家階級であったのが、近世になるとその和歌的な世界や南画等の公家を中心とした美術愛好は、俳諧や浮世絵等に幅を拡げて御用商人や庄屋階層にまで浸透していく。明治・大正期には柳宗悦・濱田庄司らによる民藝運動など、日常の美への関心が高まるが、これらは新聞や雑誌を読む新興の知識人階級向けのものであった。さらに、和歌とはまったく関わりのない川沿いの柳の風景や白壁づくりの土蔵の町並み、庶民の食卓の陶器や郵便切手の図柄、あるいは競技中の選手の表情にまで美を見出すようになったのは、戦後のことである。

このような情緒的日本文化を、日常的に、格式ばらず、気軽に感じ、楽しめるものとして現代の我々が認識するようになった背景の一つには、同じ戦後の1953年に登場するや10年も経たないう

ちに、押しも押されもせぬ大衆メディアとして一気に成長したテレビの役割が大きいのではない。戦前から存続する映像美として、時に芸術にまで昇華する映画の贅沢な世界とは異なり、テレビはお茶の間という家庭の指定席を得て、暮らしにどっぷり根差しながらそれを眺める庶民の心をつかむ娯楽としての映像を提供してきた。その存在感は、様々な番組企画や制作過程での前例のない試行錯誤の中で生み出されてきたもので、おなじ映像メディアの先輩である映画との差別化にも、このような努力の過程によって成功してきたことは間違いない。

次ページのグラフはテレビの世帯普及率(白黒・カラー)を示したものだが、この急成長が促された二大契機は1959年(昭和34年)4月の皇太子(のちの第125代天皇明仁)ご成婚と1964年の東京オリンピックである。

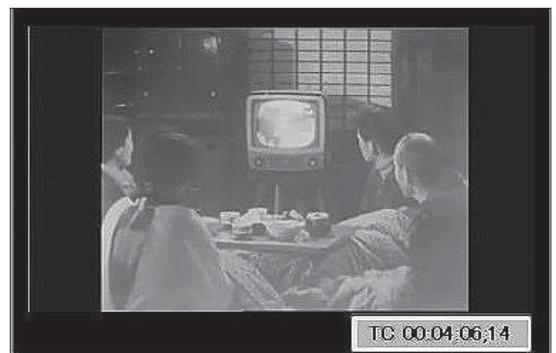
しかも、皇太子のご成婚とそのパレードのシーンを「家で見たい」と臨む庶民にとって、既にテレビの価格は大量生産により手の届くところまで低下していた。このため、白黒受像機の普及はこの時点で一気に前年比2倍以上、200万台を超え



ることになった。さらに、オリンピックについては、国際的的巨大スポーツイベントというのは当然ながら、当時の大会（52年ヘルシンキ～88年ソウル）で必ず行われていた芸術展示（Art Exhibition）<sup>1)</sup>もテレビ放送されていたことが、情緒的日本文化の映像表現に多大な影響を与えたといえる。というのも、この芸術展示では戦前の帝展のジャンルは当然として、民俗舞踊のような地方の庶民芸術までもが幅広く含まれていたからである。これを、テレビ史の視点から考察すると、東京オリンピックの開催決定から実施に至る1950年代末から60年代前半にかけては、テレビ放送が草創期を脱して急速に庶民の生活に根差し始めるとともに、地域放送局が日本の至る所でテレビ放送を開始する時期と重なっている点が重要だ。

1957年、郵政省がNHKのテレビ放送の全国普及と、各地でのNHKと民放の併存を促す「第一次チャンネルプラン」を決定すると、各地でテレビ開局の熾烈な競争が始まった。時の郵政大臣・田中角栄<sup>2)</sup>は大量予備免許交付という形でその事態の収拾を図り、「大学とテレビ局の数が、日本名物の双壁になるだろう」と言っていた<sup>3)</sup>。その結果、59年3月までにNHK34局、民放23社27局がテレビ放送を開始し、翌60年にはさらに民

放15社19局がこれに加わったのである<sup>4)</sup>。このような“開局ラッシュ”が各地で始めると、免許交付の条件としても地域の利益となるようなローカル放送への配慮が強く求められ、各局は地域文化を放送によって継承していく使命を貫くべく、地方の祭礼や伝統芸能を積極的に放送で取り上げるようになったのである。かくして、全国津々浦々のお茶の間でテレビ放送が楽しめる体制が整ってきた。「電気紙芝居とか、貧乏なこの国ではとても育つまいと言われたテレビが、山あいのへき地にも普及して話題をさらっています」と1959年3月1日放送「日本の素顔・第65集 テレビ現代のマンモス」は伝えている。



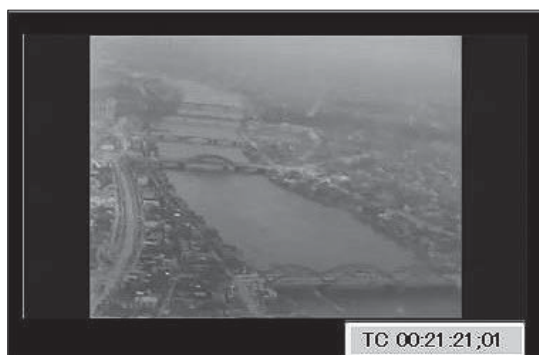
画像1 普及するテレビが支えた茶の間の家族団らん

これが、各地で民俗芸能が多々テレビ放送されるに至った放送史的な背景である。開局したテレビ放送各局を通じてご成婚パレードが生中継され、テレビの全国的な普及に拍車がかかり、テレビ受像機を作る家電メーカー各社にも多大なプラスの影響をもたらし、日本全体としても高度経済成長が確かなものとなり、そして、東京オリンピックがやってきた。このように、テレビ放送の発展と東京オリンピックの誘致・成功は、皇太子ご成婚を間に挟んだこの時期、特に切っても切れない関係として、ともに歩みを深めていったのである。

本論では2019年度NHKアーカイブス学術研究トライアルにより、この時期のNHKの番組を視聴し、そこから得た静止画を通じて「情緒的日本文化の映像表現」を番組でどのような映像美として伝えたのかについて検証する。また、当時、アジア初のオリンピックに向けて邁進していく開催都市・東京、そしてその様相を映し出すテレビ自体もオリンピックを伝えるために様々な進歩を遂げ、ともに大きく変化していく姿を、番組映像として視聴者にどのように伝えていったのかについても明らかにする。

## 2. 静止画に観る「情緒的日本文化」の表現

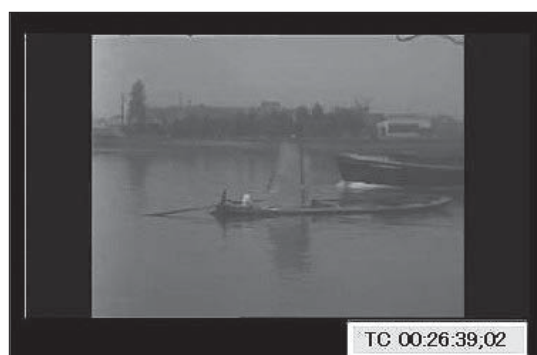
NHK 短編映画「隅田川」1956年6月30日放送



画像2 隅田川遠景

番組冒頭画像。航空写真で隅田川に架かる五本の鉄橋と両岸に密集する低層の民家を映し、隅田川一帯が戦災から復興したことを印象づけている。遠景ではぼんやりとしたトーンであえて模様のように映すことによって、細かく汚れている部分などは映さずに繁栄した街として映そうという意図が感じられる。

手漕ぎの櫓と帆がついた小さな漁船の後ろを動力の汽船が走ってゆく映像。伝統的な漢詩の美しい漁村風景のような漁船と動力船をともに映すことによって、伝統的で美しい隅田川の風景とともに戦災から東京が復興していくことを表現している。



画像3 隅田川と船

言問団子店内で団子と薄茶を楽しむ婦人たち。和服の女性たちのくつろぎを映すことによって、文人墨客の愛した墨堤の風雅が形を変えて戦災から復興した現在も引き継がれていることを表現している。



画像4 言問団子店内

広重の「駒形の渡し」の浮世絵。川船が数多く浮かんでいるさまを浮世絵で描くことによって、江戸時代に伊達藩下屋敷のあった時代、伊達侯が高尾太夫の元に通い、高尾が「君は今駒形あたり時鳥」の句を詠んだ時代の美しい川面の風景を視聴者に想像させる効果を意図した画像と考えられる。



画像5 「駒形の渡し」の浮世絵

NHK 短編映画「神戸」 1956年10月24日放送

再建された湊川神社本殿。ナレーションでコンクリート造りであることが語られるが、伝統的なデザインで再建されたことを示す画像。この都市シリーズの「神戸」ではイスラム寺院や異人館など異国情趣を強調するが、日本美も残って守られていることを神社建築のこの画像などで表現している。



画像6 再建された湊川神社本殿

NHK 短編映画「福岡」 1956年4月1日放送

能装束の側次のような袖なしの上着をつけた男性が二本の長剣を一本ずつ左右の手に持って舞

う。剣を前に交差するポーズの映像。福岡放送局開局記念の最初の映像にこの舞を持ってきたのは、福岡県には黒田藩以来の武家の舞の伝統があり、それがこのような村の神楽にも残っていて、「福岡県らしいもの」として視聴者にアピールする意図があるものと思われる。この剣の舞は躍動的で動きが多いが唄は伴わない。唄を聴かせるラジオと異なり、茶の間で舞の動きを見せるという意図をもって、動きが大きいこの剣の舞を開局記念番組の冒頭に置いたように思われる。



画像7 福岡県の剣舞

能の赤頭や白頭をつけて柔道着風の衣装をつけた少年たちが台に据えた太鼓の周りを一列になって廻りながら太鼓を打ってゆく。これも、このように福岡県の辺地に伝承されている珍しい祭礼を茶の間で見られるという意味で、所作を見せる映像を意図した催しの選択であると思われる。



画像8 福岡県の太鼓踊り



「万葉時代からの街道」というナレーションと共に紹介される茅葺の民家、歴史の長さと、その暮らしぶりが現在にも続いていることを、民家とかまどの煙突で表現している。



画像9 福岡県の茅葺家

# 「民謡膝栗毛」 1958年6月9日放送

最初の演目。「会津東獅子舞」囃子方の前を三頭の獅子が舞う、背景に幕が張ってはあって、まつりの場ではなくスタジオもしくはステージと考えられる。登場人物が「会津東獅子舞」の垂れ幕をさげていることによって、小道具で視聴者にこの内容を知らせる工夫をしている。



画像10 会津東獅子舞

# NHK 短編映画「沖縄」 1956年5月16日放送

沖縄の特産の布。図柄で戦争で燃える前の首里城と入江に浮かぶ木造船を描き、薩摩藩支配下での琉球の繁栄ぶりを強調している。この短編映画は米国占領下の沖縄の日本への返還運動の機運を

日本国内で醸成する意図を持って制作されていると思われるが、沖縄特産の布に、アジア的イメージの宮殿建物と船を描くことによって沖縄の文化が米国の文化ではなく日本文化を基盤に持っていることを印象づける絵柄となっている。



画像11 沖縄特産の布の図柄

琉球王朝の宮廷舞踊の流れを汲む舞踊の地方。向かって右の二人が三味線に似た楽器の三しん。左が箏。布は沖縄の特産品と考えられるが三人とも中国服でも韓服でもなく和服の小袖着流しの姿。箏の女性の髻が琉球風だがそれ以外は日本内地の三曲合奏の温習会のような服装で、部屋のしつらいも畳に金屏風、襖と日本的で均整美のある美しいしつらいとなっている。沖縄に今も伝承されている日本美を強調して、五輪の芸術展示に主権はアメリカにあるとしても沖縄舞踊や民謡を含める下地作りを模索している画像に思われる。



画像12 琉球舞踊の地方（伴奏者）

### ドラマ「魚住少尉命中」 1963年12月7日放送

回天が母船を離れて輸送船に突入する直前の魚住少尉の幼時の回想シーン。母に囲炉裏端で子守唄を歌ってもらって寝た幸せな思い出で、木綿の子供着と母の和服で幸せな子供時代を象徴している。母が子守唄とともに昔話で「近づく竜巻を村人に知らせるために自らの家に火をつけて村人を救いながらも自らは死んで星となった吾作」の話を幼時の魚住少尉に聞かせており、空襲から人々を救うために自ら魚雷となって敵艦に体当たりして死ぬことを志願した魚住少尉の行為が母に聞いた吾作をモデルとしていることを、幼時の回想の形で象徴的に美しく表現している。



画像13 囲炉裏端の母子

### 「アイヌの舞踊～第6回全国民俗芸能大会～」 1955年11月6日放送

手前に民族衣装を着た八人の女性が四人ずつ二組に分かれて座り、床に置いた太鼓のような楽器を打ちつつ唄う。後ろに立つ三人の男性がそれぞれ楽器を持ちアイヌらしい民族衣装を着て唄っている。男性のうち向かって左の二人は長いひげをはやしている。後ろの壁が白いことからスタジオにセットを組んで撮影していると考えられるが民俗衣装とひげをふくめた化粧、楽器によってアイヌの祭礼の唄らしさを演出している。この場面は民謡であって所作は伴わない部分だが出演者の衣装や化粧などでアイヌの民謡らしさを演出し「観

て場面が分かる民謡」を茶の間の視聴者に提供しようという意図が見られる。



画像14 アイヌの民族音楽

## 3. オリンピック開催都市・東京と ホスト放送局の意気込み

日本が戦後、オリンピック開催に向けて初めて手を挙げたのは、日本を占領下に置いていた連合国との間でサンフランシスコ平和条約を締結し、主権回復を果たした2年後の1954年（昭和29年）だった。ちなみに、これは日本でテレビ本放送が始まった翌年である。最初は実現しなくても、手を挙げ続けることが重要だとする国際オリンピック委員会（以下、IOCと記す）の強いアドバイスがあつてのことで、初めて立候補した1960年第17回オリンピックの日本開催に関しては、「地理的な問題、派遣費用の問題で不可能と思われる。むしろ第18回大会に焦点を合わせ全ての招致活動をすべきであろう」と1955年に来日した当時のブランデーIOC会長自身も直々に意見を述べたことは、公益財団法人日本オリンピック委員会も認める事実である<sup>5)</sup>。

かくして、この1960年夏季オリンピックが同年のIOC総会で同じ欧州の枢軸国、つまり第二次世界大戦の敗戦国だったイタリアの首都ローマに決まるや、東京都議会は次の第18回オリンピック招致を満場一致で決議した。IOCは翌56年の

IOC総会で58年総会を東京で5月13日に開催することを決め、アジア初のオリンピック立候補都市・東京に寄り添うような姿勢を示した。1964年（昭和39年）夏季オリンピックの開催地が決まったのは、その翌59年5月のIOC総会（西ドイツ＝当時・ミュンヘン）でのことだった。皇太子ご成婚の約1ヶ月半後の日本に再びもたらされた国民的慶事である。

オリンピックは、同じく巨大な国際スポーツ大会として知られるサッカーやラグビーのワールドカップとは異なり、一都市開催が原則である<sup>6)</sup>。その舞台に選ばれることを大いに期待しつつ、高度経済成長とともに大都市へと飛躍的に変貌しつつある東京を独特の視点で描いた30分番組「NHK短編映画・大東京の顔」は、東京でのIOC総会を約1ヶ月後に控えた1958年4月11日に放送された。

冒頭からおどろおどろしい不協和音が管楽器でかき鳴らされる不安定な音楽とともに、ビルが立ち並ぶ大都市・東京の風景が映し出され、建設途中の首都高速がアップになる。突然、ビートの効いたアップテンポな曲調に変わると、線路を行き交う列車のうちの一本が駅のホームに滑り込んでくる。中から吐き出されてきた人たちが駅の階段いっぱいにつむき加減で足早に降りていく。



画像15 朝の通勤“地獄”は大都会のシンボル

バックには依然として勇まし気に、しかし不安を掻き立てるように落ち着いた曲調の音楽が流れ続けている。「850万の人口を抱えた大東京の

表情。」と切り出した後、そのワンカットの映像と音楽が続き、「我が家から勤め先に向かうサラリーマンの群れは、一定の流れに沿って押されるように動いています。」のナレーションまで実に40秒以上という何とも贅沢な映像表現である。

一転して上野駅。集団就職の中学生が到着し、こちら人も、また人、の群れだが、平均年齢は明らかに十歳ほど若い。髪をひとまとめにし、不安そうに唇をかみしめる少女の表情がアップになる。平成29年度前期連続テレビ小説「ひよっこ」の主人公を彷彿とさせる。「まだ慣れない目の当たりの都会が鋭く神経に食い込んできます。」というコメントも、都電にトラック、乗用車、三輪車で混雑する道路の映像にかぶる「車、車、車の行列、今にもはち切れそうな神経と、一秒、一刻を争うすさまじいまでの忙しさがごっちゃになって平然と住んでいる都会です。」というナレーションも、21世紀には聞かれないような表現が時代を感じさせる。開けた窓から見える運転手の横顔から思いっきりズームアウトすると、間もなく発進するそのタクシーが走り去るのを全景で見送ったカメラが次に、オートバイを駆るサングラスの男性をアップで映し出す頃には、音楽はすっかり消え、大都会を行き交う車の音だけが響き渡っている。「人間様より車の方が強い世の中。埃も高いでこぼこ道が都会の円滑な循環を遮っています。」土煙を上げて舗装されていない道を通り過ぎる車のクラクションと、ドリルで道路に穴を空ける大きな音。「掘り返してはまた掘り返す東京の道。大東京の建設は涙ぐましい限りです。」

「ビルの建設現場。そこはサラリーマンが人生の大半を過ごす大切な場所でもあります。」というコメントとともにコミカルな曲調で、会社と思われる内部の風景が映し出される。待ちに待った給料日、封筒に入った現金を受け取るサラリーマンたち。「総理府の統計によりますと、東京のサラリーマンの平均は1万3千円余りという数字です。」封筒の中の金額を数えるOL（オフィス・レ



ディ)の表情を追い、「金額が嬉しいのも然ることながら、何かしら物悲しくもなる瞬間です。」と告げた次の瞬間、映像はデパートに切り替わっている。「しかし、都会の消費は数が数だけに素晴らしくたくましいようで、美しく待ち構える消費の誘い掛け。」“特売場”は、お目当ての商品を奪い合うように確保しようとする人であふれかえっている。

もろもろの感情を音楽に爆発させ、若さを熱狂のリズムに酔わせるロカビリー。白いスーツに身を包んでギターをかき鳴らしながら「ダイアナ」を歌い上げる若き日の平尾昌晃。しかし、その歌声は悲鳴のような絶叫にかき消されてはほ聞こえない、ステージにテープを投げ込むだけでは飽き足らず、壇上にのぼって彼に抱きつく若い女性ファン、或いは別の歌手の足に抱き着き、舞台下に引きずり下ろす他の女性ファン。コメントは要らない。夜のとばりが下りる頃、「いらだった都会の調整弁をアルコールに求める人々。」「庶民の安定剤も一部ではまた、刺激が刺激を呼び、かくして、男が女に化けたおやまバーの開業です。」



画像16 化粧とかつらで見えるうちに大変身

そして画面は「神経科」の看板が変わった。「激しい都会の刺激や不安は神経を痛めつけ、このところいわゆるノイローゼ患者が増える一方です。その数は終戦直後からみると2倍近くになっており、したがって、神経科の病院の方も東京では2倍以上に増えています。」「あれやこれや、都会の

神経のからくり、斯くしてめっきり増えたのがノイローゼ。おかげで薬屋さんは、大繁盛。ノイローゼ様、様・・・薬を作る工場はあまりの忙しさにこれまたノイローゼ気味という。」病に関してややも冗談めかしたようなコメントを今時、流せるはずがない。続いて、「自由を束縛された状態ではもがきあがいてヒステリーのようになります。」として、四肢がつなぎ留められたねずみが映し出され、さらに、その解剖シーンが続く。れっきとした大学研究室でのロケで、「都会のあらゆる刺激、不安、いわゆるストレスが体にどのような影響を与えるか、動物実験をしているものです。」

「ある宗教団体の錬成道場という所を訪ねますと、ここにもノイローゼにかかった人たちが大勢詰めかけていました。」このナレーションに合わせて、その場に集まっている人の顔が実はアップで何人も映っている。彼らがみなノイローゼ(?)なのかどうかはさておき、このような私的な集会への参加シーンをそのまま放送すること自体、プライバシーが重んじられる21世紀の日本社会では、放送倫理違反を問われかねない。彼らは一樣に笑顔を見せて、講話に聞き入っている。「人間は笑えなくなったら、どういうことになるのでしょうか。笑えるということは人間の特権です。」



画像17 太鼓のようなものを打ち鳴らし講話が続く

突然、画面が真白になり、満開の桜が一面に映し出される野原のエアショットに切り替わる。洋画風の伸びやかでドラマチックな音楽とともに、

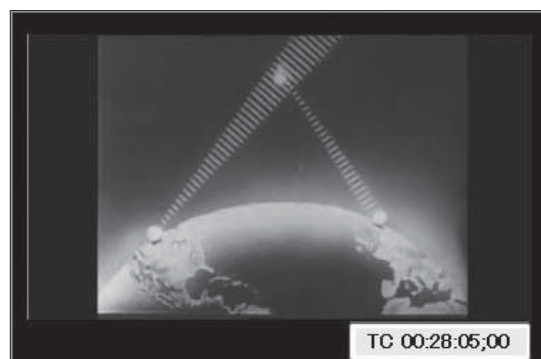
これまた老若男女であふれそうなお花見列車が走ってくる。「東京の郊外は花を求め、自然の中に安らぎを求める都会の人々でごった返しています。同じ超満員でもこちらは神経安定のための超満員、それもまた大東京の顔の一面であります。」そして、エンディングを示す「終」の文字。

人と車でごった返し、ともすれば人間らしい暮らしを送るのも難しいほどの大都市に成長した東京が遂げるダイナミックな変化は、その東京の様々な様相を映し出すテレビ自身の姿とも実は重なっている。

二本目の番組、「世界を結ぶNHK」は東京オリンピックを半年後に控える1964年の放送記念日<sup>7)</sup>に放送された30分番組で、きたるオリンピックへの期待を込めて放送の様々な準備状況について伝えるとともに、それを視聴者にどのように捉えてほしいとNHKが考えているかが見えてくる。まず、同年1月から始まった“大型テレビドラマ”<sup>8)</sup>「赤穂浪士」の松の廊下の名場面をバックに、「かつて、テレビは贅沢品でした。それがわずか10年の間に、心の憩いとして、私たちの茶の間にすっかり溶け込んでしまいました。」と始まる。翌月には、建設業界を舞台に黒部ダムなどにおける男たちの苦闘をスケール大きく描く連続ドラマ「虹の設計」<sup>9)</sup>も放送開始を控えている。いずれも「一流スターによる薫り高い娯楽番組として、今その制作が進められており、娯楽を楽しむ人々にとって、家庭の茶の間はそのまま観客席になってきたのです。」とドラマ放送の手応えに胸を張る。草創期のテレビドラマは、スタジオからの生放送で制作された「スタジオドラマ」以外では、民放も含めてアメリカから輸入した「テレビ映画」が主流であった。1960年代に入ると、米国作品の人氣が高く価格も高騰して入手しにくくなり、テレビ局が自前で“国産テレビ映画”の制作に乗り出す動きが活発になった。NHKは1961年から局制作による「テレビ指定席」をスタートさせた。放送は1週間を締めくくる土曜日夜8時からで、

社会の片隅に生きる庶民にスポットを当てた単発ドラマ作品群はお茶の間の人氣を博した<sup>10)</sup>。ちなみに、TBSの「日曜劇場」は一話完結のドラマ枠として草創期の1956年に始まり、「ドラマのTBS」の礎を作った。

「世界を結ぶNHK」は、オリンピック半年前を意識してタイトルも「世界」と銘打っているように、海外取材番組やヨーロッパの楽団・歌劇団の招へいなど放送事業が世界と結ばれている様子を中心に描かれている。「しかも最近になってテレビの力はさらに飛躍を遂げました。」として次に紹介されるのは、その前年の1963年11月23日に成功した日米両国を結ぶ“宇宙中継”<sup>11)</sup>である。「テレビは地球の裏側の様子を全く同じ時刻に茶の間に送り込む力を持ち始めたのです。」として、その宇宙中継の仕組みについて、当時の番組にしてはまだまだ珍しいイメージ映像まで特別に作って映像の中に入れて込んでいる。

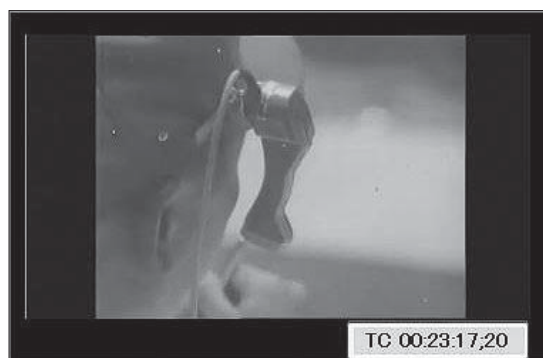


画像18 イメージ映像で伝える“宇宙中継”の仕組み

ただし、オリンピックの本番では中継する間に映像の画質が落ちないように、音声とは切り離して通信衛星「シンコム3号」を経由してアメリカに伝送された。このため、音声信号は別途、太平洋同軸ケーブルで送られ、その後、現地の受信局で映像と音声の双方を組み合わせるという複雑な方法がとられた<sup>12)</sup>。日本からの映像は非常に鮮明、かつ乱れもまったくなしと米国紙は報じた<sup>13)</sup>。

さらに、オリンピックの実況をより確かで効果

的なものとするため、自分たちで開発した放送“兵器”の一部もNHKは紹介している。たとえば、どこにでも持ち歩ける超小型テレビカメラに加え、注目を集めたのが、周りの雑音に邪魔されないための接話マイクだ。これは、話者の声だけを明瞭に集めるのが目的だから、口に極めて近い箇所、かつマイクロフォンをしっかりと動かさない定位置で收音することが必須になる。東京オリンピック放送用（ML-1型）はマイク本体を固定するため、画像19のように帽子に取り付け、音響管をそこから口元まで延ばして音の取り入れ口とする構造になっている。話者の都合により收音しないようにする遮断スイッチも備えていた。国民体育大会やマラソンなどの実況番組で使用され、現場の意見も採り入れながら手直しされたものが、東京オリンピックまでに約300個製品化された。それでも必ず帽子を被らなければならないなど使用上の制約が多いことから、次の72年札幌冬季オリンピック用（CL-201型）ではヘッドホン型が採用され、マイクもより小型化して取り付けられるようになった<sup>14)</sup>。



画像19 初使用した海外アナウンサー曰くこれは「マジックマイク」

しかし、とりわけ大掛かりだったのは、世界36ヶ国から3千人の選手団が参加した63年の東京国際スポーツ大会（いわゆるプレオリンピック）最終日のマラソン中継で初登場した自動追尾装置のアンテナだ。ランナーの頭上を高く飛ぶ中継ヘ

リコプターの底に据え付けられたこの送信アンテナは、自動的に基地局に向くように仕立てられているため、全コースの完全中継放送に成功し、「世界の注目を浴びた」。言ってみれば、上空を飛行するヘリを衛星に見立て、力走する選手の映像電波を中継車から飛ばして局に送る仕組みで、まさに宇宙中継の小型版となっている。ヘリ中継自体は今でこそ珍しくないが、驚くべきは、そのアンテナを搭載して飛ぶのが、機体に「自衛隊」と記されたヘリコプターだったことだ（画像20）。



画像20 移動体の映像・音声の中継の小さくて大きな切り札

確かに、開会式の上空で五輪を描く祝賀飛行を担当したのも、航空自衛隊所属のブルーインパルス（曲技飛行隊）ならば、開会式の旗手も全員、防衛大学校学生隊であり、それこそ開会式に向けたヘリコプターによる各国要人輸送も航空自衛隊が担当した。オリンピックは挙国一致で、との姿勢の表れだと考えればいいのかもかもしれないが、一マラソン大会の中継に自衛隊のヘリが投入されるとはさすがに予想外ではないか。もちろん、時速20キロ程度で走る選手と中継車との間上空数百メートルを2時間半以上付かず離れず、正確に飛行する高度な操縦技術は、航空自衛隊ならばお手のものであっただろうが。

番組では紹介されていなかったが、この東京国際スポーツ大会でやはり初めて登場し、以後、スポーツには不可欠になったもう一つの放送技術が

スローモーションVTRである。当時、NHK放送技術研究所の依頼により、その技術開発に貢献した企業の技術者が大会期間中、陸上の女子ハードルで日本勢が決勝で1着になった瞬間を撮影していた。そのシーンをスローモーションVTR映像の練習のつもりでオンエア調整室に映し出していたところ、これを見ていたプログラムディレクターから「これはすごい！これを直ぐに放送する」と連絡電話で指示があり、いきなりオンエアされたのが始まりであった。「多くの方々が、アスリートの躍動を伝えるスローモーション映像を待ち望んでいることを改めて実感しました。」とその技術者はのちに述べている<sup>15)</sup>。

以上、二本の番組からは、高度経済成長が始まった東京での仕事と暮らしが、いかに生き馬の目を抜くもので、癒しや潤いがなかなか感じられず、環境が悪化したり、心が荒んだりしていくもののが感じられる一方で、オリンピックという大きな国家目標に向け、放送も含めた様々な機関の関係者がその成功のため連携し合う姿も垣間見られた。都市化したとはいえ、衛生面では63年3月末時点での東京23区の下水道普及率は25%にも満たなかった。トイレの多くはまだくみ取り式でハエが発生し、川ではボウフラが湧くことから、ハエと蚊を根絶する運動が進められていた。一年前にプレオリンピックとしてリハーサル大会を行ったオリンピックは東京が初めてだったが、その東京国際スポーツ大会がこけら落としのイベントとなり、オリンピックのメイン会場となる国立競技場の一帯では選手控室も含め、殺虫剤を散布する消毒活動が行われた<sup>16)</sup>。さらに町全体をきれいにすべく、「美しい国土でオリンピックを」というスローガンのもと、国民こぞっての国土美化運動が展開された。聖火リレーの予定コースもパレードが先に練り歩き、紙くずのない日本作りを訴えた。まさに最後は、日本人が総出で東京オリンピック成功のため献身的な協力を行ったのだ。この1964年オリンピックから東京2020まで、日本の

オリンピック開催数は夏冬合わせて4回となるが、これはアメリカの8回、フランスの5回に次いで3番目に多い<sup>17)</sup>。オリンピック好きという日本人についてのやや自虐的な見方も、オリンピックに寄せる特別で崇高な思いとあながち無関係だとは言えないのではなかろうか。

## 4. まとめ

本論の冒頭に記した「情緒的日本文化を、日常的に、格式ばらず、気軽に感じ、楽しめるものとして現代の我々が認識するようになった背景の一つには、同じ戦後の1953年に登場するや10年も経たないうちに押しも押されぬ大衆メディアとして一気に成長したテレビの役割が大きいのではないか。」という指摘については、ドラマやドキュメンタリーに限らず、あらゆる機会を捉えて日常の美を茶の間に届けようとした映像番組について十分にうかがえるものと思われる。根底に貫かれるのは、戦前からの日常の美しいものを確かに保存しつつ、戦災で傷ついたものについては復旧・復興を経て新たな豊かさと自由を謳歌することを前向きに肯定的に美しく伝えたいとする映像制作者たちの意志である。

このような映像の中には、オリンピックの到来とともにますます注目が高まるスポーツも含まれるようになった。「NHKテレビ15日午後、東京国際スポーツ大会のマラソン中継は、全コースを完全中継したが見ごたえがあった。・・・いつものマラソン中継では、二位以下の選手のゴールインをおろそかにする優勝選手のインタビューがなかったのはよかった。従って、この日は十位くらいまでのゴールがわりによく見られた。なお、着順、タイムは、字幕で入れた方がより分かりやすいし、実況の方もスッキリするように思える。」と39歳の東京在住の読者からの投稿を読売新聞がレース4日後の番組欄に載せている<sup>18)</sup>。より良



い番組制作を心がけると、視聴者は必ずついてくる、のみならず、さらにアドバイスまで供してくれる。完全中継を初めて実現させた放送技術の進展に優勝インタビューの入れどころのタイミングなど、あらゆる工夫と努力の積み重ねによってお茶の間に「見ごたえ」という美しさのある映像が届けられるようになっていった。庶民にとってテレビ番組を視聴することが、ニュースであれ、ドキュメンタリーであれ、娯楽性を持つことにつながったのである。有益な情報をお茶の間で楽しみながら一家で得ることができるのが、映画館に行かなければ見られない映画とは異なるテレビ放送の大きな特長で、東京オリンピックに向かう時代に確立され、新たな「放送文化」を形成していったことが見て取れる。今後はさらに番組を拡げて「臨場感をもたせつつ美しく伝える技術」について検討し、この時期の放送人が築いた「放送文化」とは如何なるものであるかを明らかにし、同時にそれが演劇や音楽・スポーツにもたらした影響について考察を深めてゆきたい。

最後に、NHK 番組アーカイブス学術研究トライアルの枠組みでオリンピック関連番組の視聴依頼を複数出していたが、NHK に権利がないとの理由により、残念ながら一本も見ることができなかった。「オリンピック」と名のつく限り、番組の映像権は最終的にすべてオリンピックの主催者である IOC に帰属するからだ。放送権を有する放送局 (NHK) が「放送」すること自体についてはもちろん何の問題もない。しかしながら、オリンピック・ムーブメントのさらなる発展のためには、営利を目的としない研究、あるいは教育を目的とする場合に限って、このような権利関係が発生しないような新たな枠組みの創出を IOC にもそろそろ構想していただけたらと考える。そもそも、スポーツコンテンツと映像 (メディア) との間に特に強い親和性があることは、放送権料が IOC の大きな収入源となっている点から見ても、IOC にも十分に理解されているものと考えられるからである。

## 補記

本研究は2019年度第1回NHK 番組アーカイブス学術研究トライアルの成果の一部となります。貴重な映像資料の閲覧の機会と静止画の提供を戴いたNHKに感謝申し上げます。また本稿作成のための放送資料の整理には、2019年度高橋信三記念放送文化振興基金の助成金を使わせていただきました。記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 脇田泰子「東京オリンピックの文化発信と海外の受け止めに関する基礎的研究」、(単著)、2017、「相山女学園大学文化情報学部紀要」第17巻、p. 140
- 2) 1957年7月、弱冠39歳で第一次岸信介改造内閣に郵政省 (現・総務省) のトップに抜擢された。「仕事をテキパキと片付けてぐずぐずしないところが気に入ったからである。」と岸はその著書『岸信介回顧録 保守合同と安保改定』で述べている (広済堂出版、1983、p. 354)
- 3) 松田浩『ドキュメント放送戦後史Ⅰ』、双柿舎、1980、p. 314
- 4) 日本放送協会編「20世紀放送史 (上)」、2001、p. 398
- 5) 飯塚恵理人・脇田泰子「テレビ草創期からの番組に見る日本らしさの象徴と文化の表現に関する研究」、「相山女学園大学文化情報学部紀要」、第18巻、2019年3月、p. 19、p. 30
- 6) オリンピック憲章第5章オリンピック競技大会32 オリンピック競技大会の開催2.「オリンピック競技大会を開催する荣誉と責任は、オリンピック競技大会の開催都市に選定された都市に対し、IOCによって委ねられる。」ただし、この規定は、2019年6月26日、IOC本部ローザンヌで開催された第134次IOC総会において改正され、有効となった最新版の同憲章同条項 (32-2) では「オリンピック競技大会を開催する荣誉と責任は、オリンピック競技大会の開催地として選定された、原則として1都市に対し、IOCにより委ねられる。しかし、適当であると判断できるなら、IOCは複数の都市、あるいは複数の地域、州、国など他の行政単位をオリンピック競技大会の開催地として選ぶことができる。」と変更されている。2020年東京オリンピックでのマラソンと競歩の札幌開催が決まったのは、その約1年半後である。  
<https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/General/FR-Olympic-Charter.pdf> (最終閲覧日2019年10月10日)
- 7) 日本で初めてラジオ放送が始まった1925年3月22日にちなんで、3月22日は放送記念日である。NHKでは、毎年必ずこの日に放送に関する特集番組を放送するならわしがある。
- 8) 後に「大河ドラマ」と呼ばれる日曜夜に一年間をかけて放送される時代劇のシリーズは、1963年放送「花の生涯」が第1作で、64年の「赤穂浪士」は2作目。主人公の大石内蔵助を長谷川和夫が演じた。当時は「大型時

代劇」と称されたほか、NHKはこのようにテレビ局が作るドラマという点を強調して「大型テレビドラマ」とも呼んでいた。

- 9) 1964～1966年、週1回の連続ドラマで各回49分。約2年に及んだ放送が社会に与えた影響は大きく、建設業界を志す若者が激増したといわれる。
- 10) 第2章6ページに静止画の出ってくる「魚住少尉命中」も1963年制作の本シリーズ。元特攻隊員の「命中までの時間が長く、50分以上かかったこともある」との証言に着想を得て、ドキュメンタリーで活躍していた吉田直哉が初演出を手掛けたドラマ作品でイタリア賞を受賞した。
- 11) 今でいう「衛星中継」のこと。
- 12) 脇田泰子「東京オリンピックの文化発信と海外の受け止めに関する基礎的研究」、「相山女学園大学文化情報学部紀要」、第17巻、2018年3月、p. 142
- 13) 2019年12月13日付毎日新聞「日本の五輪放送 1964年東京大会で『宇宙中継』」  
<https://mainichi.jp/articles/20191211/k00/00m/050/072000c>  
(最終閲覧日2019年12月20日)
- 14) 溝口章夫「オリンピック放送用接話マイクロホンの開発」、『日本音響学会誌』68巻2号、2012年、p. 105
- 15) <https://www.teac.co.jp/jp/special/slowmotion-topic>  
The History of Recording & Sound (最終閲覧日2019年10月10日)
- 16) 2019年9月21日付朝日新聞夕刊10面「東京五輪物語」
- 17) アジアでは、韓国が2回（1988年夏・ソウル、2018年冬・ピョンチャン）、中国が1回（2008年夏・北京）それぞれ開催したにとどまる。
- 18) 1963年10月19日付読売新聞朝刊10面「放送塔」

いづか・えりと/文化情報学部教授

E-mail : erito@sugiyama-u.ac.jp

わきた・やすこ / 文化情報学部教授

E-mail : wakita@sugiyama-u.ac.jp